第１回四国ブロッククラブミーティング 2009 開催報告

日時：2009 年6月 21 日日曜日　12 時 45 分～17 時
会場：徳島県「アスティとくしま」

はじめに…

去る6月 21 日に徳島県のアスティとくしまにて、第1回四国ブロッククラブミーティング 2009 が開催された。四国ブロックの 14 の創設支援クラブ（2年目：8クラブ・1年目6クラブ）、他ブロックから参加の3つの創設支援クラブから 28 名の担当者と、その育成を支援する4県全てのクラブ育成アドバイザー、県体育協会事務担当者、地方企画班員が今回のクラブミーティングに参加した。

今回のクラブミーティングの目的は、「集客と地域を巻き込む事業のあり方について考える」という点にあった。それは、全ての創設支援クラブは、いずれ自立と自律が求められ、クラブの目的を達成するために意味ある事業、つまり集客や地域住民、地域の関係団体をうまく巻き込む事業を実施する必要があるため、得た委託金を単に消化するのではなく、組織の目的を達成するための根幹となる事業の重要性について再認識してもらいたいからである。

基調講演：「集客につながる事業・地域を巻き込む事業」

まず、NPO 法人東かがわ市ニューツーリズム協会理事長の大字數義（おおじかずよし）氏をお招きし、「集客と地域を巻き込む事業」についてご講演いただいた。

NPO 法人東かがわ市ニューツーリズム協会は、地域に根ざした長続きする新しい観光・交流のあり方を研究し、実践する組織として平成 17 年4月に設立され、以来、地元の観光資源である「讃州井筒屋敷」の管理運営に携わるだけでなく、地元特産品を生かしたオリジナル商品の開発・製造・販売や、観光地としての魅力を情報発信するなどに取り組む団体である。そのような活動が認められ、「かがわ 21 世紀大賞」として知事表彰も受けている。

民間人として飛行機の整備や伝統産業である手袋づくりに携わってきた大字氏は、行政改革や地方分権が叫ばれる中、当時、行政主導によって立ち上げられたNPO 法人には、いずれ「自立」が求められ、地域産業や地域活性化も行政主導から住民主導への転換が要求されることを見越していたという。つまり、地域に生きる組織は、まず時代の流れに飲み込まれないように先んじて手を打つことが肝要であるということを、自らの経験をもとに語った。そして観光が立ち後れ、過疎化しつつある東かがわ市において、成長産業として捉えられていた観光事業を軸に、地場産業の活性化を図るため、5つの方針を決めて組織の活動に取り組んだということである。その5つの方針とは、①マスコミの指導・協力、②地域住民の観光意識の高揚、③地域住民のボランティア意識の高揚、④資源の開発と魅力づくり、⑤資源の商品化・ブランド化である。この5つの方針を軌道に乗せるために大字氏は、全国各地の百貨店などに営業を仕掛け、地場産業であった「手袋」の認知度向上に奔走したという。

大字氏は、自ら新しい取り組みに対して積極的に手掛けるようにすれば、自ずとマスコミがその取り組みを取り上げてくれるようになるということや、マンネリ化する既存事業の流れを変えるために、既存団体に対して妥協せず、一対一の対面の話し合いをし、地域住民の協力を取り付けることが重要であることを示唆した。中でも住民の協力については、「自分中心から相手や地域のために…」という住民自身の発想の転換を図ることや、自主的にボランティアにかかわらせて、役割分担・権限委譲・責任の付与という一連の流れの中から、1つのテーマに住民の意識を向けさせ、体験を通じて住民自らが「我々にもできる！」という実感と想いを持たせることが重要であると述べた。つまり、人を集める仕組みづくりには、妥協せずコンセプトの合意形成を図ること、地域の人々とふれあうことによって先につながる信頼関係を構築すること、体験・経験を積み重ねて住民自らが「できる！」という実感を抱き、住民をその気にさせること、そして地域の資源を活かすと同時に育み、人材育成を踏まえ、次につながる事業を仕掛けることの必要性を強調した。

大字氏が発する語気には、経験に裏打ちされた説得力、そして情熱が感じられ、創設支援クラブのみならず、その場にいた地方企画班員やクラブ育成アドバイザー、体協事務局職員にとっても貴重な気づきを与えていただけるような充実した講演内容であった。

グループディスカッション・グループワーク

第1回目ということもあり、1年目クラブと2年目クラブとのニーズと経験知を考慮して、1年目：グループワーク、2年目：グループディスカッションをそれぞれに分かれて実施した。

1年目・2年目クラブともに、事前に課題を設定し、1年目クラブには、「クラブ設立に向けた基本的なステップ」として、自地域の状況や住民のニーズを把握するために必要な基礎情報（人口規模と高齢化率、国民医療費、小・中・高校生の児童・生徒数、中学・高等学校の運動部の加入率など…）の収集という課題を課し、前田地方企画班員による「クラブ設立に向けた基本的なステップ」のミニレクチャー、そして策定した年間事業計画書と収支予算書を見直すための

グループワークを実施し、地方企画班員、クラブ育成アドバイザーからコメントや助言が述べられた。
　2年目クラブについては、「集客できる・地域を巻き込む事業のあり方」について考えるために、これまで各クラブが実施した事業の中で、集客できた・地域を巻き込めた事業と、集客できなかった・地域を巻き込めなかった事業を1つ取り上げ、その事業の成功要因・失敗要因の分析、そして事業がクラブにもたらした効果について洗い出しを行うグループディスカッションを行った。

　主な内容は、以下の通りである。

■1年目クラブのグループワーク

□限られた予算をうまく割り振る
□有資格者・地元指導者など支払う謝金の使い分け、参加費と謝金の適正なバランスを保つ
□公民館が無料でプログラムを提供しているため、有料のクラブには参加者が集まらないという不安
□地域の状況に応じた価格設定と徴収する会費に見合ったクオリティの高いプログラムを提供する
□既存団体とのかねあいを考え、これまでスポーツ参加機会に恵まれなかった人にターゲットを当てる
□スポーツだけにこだわらない柔軟な事業展開と「地域活性化」をキーワードに住民の理解を得る
□地域で求められているものをクラブで提供する工夫（アンケート調査などの有効活用）
□クラブ単独の活動だけでなく、県・体協のイベントにおける連携・PR を図る工夫

ミニレクチャー

グループワーク

■2年目クラブのグループディスカッション

□集客できた・地域を巻き込めた事業で集約された成功要因
・アナログな広報活動（手書きのイラスト・ネーミングへのこだわり・参加者の声を掲載する…）
・躊躇せず、やりたいことをやる！（提供者が躊躇しない・提供者自らが楽しく…）
・魅力ある指導者（有名なアスリートによるプログラム指導・参加者の心をつかむ指導者…）
・有効な口コミ（参加者が新しい友達を誘う…）
・参加者にとって都合のよい施設・活動場所（参加者の視点・行きやすさ・ターゲットに合わせる…）
・豊富なメニュー（参加者にとって新しい体験の提供・遊びの要素・ほんの少しの付加価値の提供…）
□集客できなかった・地域を巻き込めなかった事業で集約された失敗要因
・プログラムのターゲットも場所も見誤った（高齢者の体力測定を山の上の施設で開催…）
・担当者が作業を抱え込んで黙々と行う（周りとのコミュニケーションの欠落・発想の行き詰まり…）
・自分の想いを他人に求めすぎ、押しつけた（スタッフ間の価値観にズレが生じてしまう…）
・思いつきで事業をしない（事前調査をしない・十分な検討をしない・計画を十分練らない…）
・良くも悪くも数名の意見を鵜呑みにしない（一部の声で、スタッフが右往左往してしまう…）
□参加者が多いから成功・少ないから失敗ではなく、事業の目的が達成できたかどうかが評価の観点
□事業に参加してよかった・ボランティアに参加してよかったという気持ちになってもらうことが大事

グループディスカッション

おわりに…

基調講演をいただいた大字氏は、「助成金は使って終わりではなく、大きな流れをくみとり、それを追い風にするために、助成金をいかに活かすかが重要であり、事業は次につなげなければ意味がない」と述べられていた。各クラブにおいても、自らの取り組みを「成功・失敗」という短絡的な発想で捉えるのではなく、クラブが描く夢や目的がかなえられたのか、またそれを叶える努力をしたのか、さらには、そのためにこの公金が有効に活かされたのか、そのような想いを持ってもらいたいと思う。無論、地方企画班員やクラブ育成アドバイザーを始めとしたスタッフが創設支援クラブにとって、貴重な機会を提供すること、そのために試行錯誤し、思い悩んでいるであろうクラブの声を反映することについては、我々も努力を惜しまない覚悟だ。

11 月に香川県で開催される2回目のクラブミーティングは、創設支援クラブと既に設立されたクラブとの交流機会を設け、クラブづくりのアイディアやクラブ運営のノウハウなどを知るチャンスを提供するだけでなく、共存と共創を生むネットワークの構築につながるような工夫や仕掛けを施したいと考えている。これまでずっと言い続けてきたように、「四国は一つ！」という想いをクラブづくりとスポーツ振興によって少しでも実現できればと切に願っている。

（報告：地方企画班長　長積　仁）